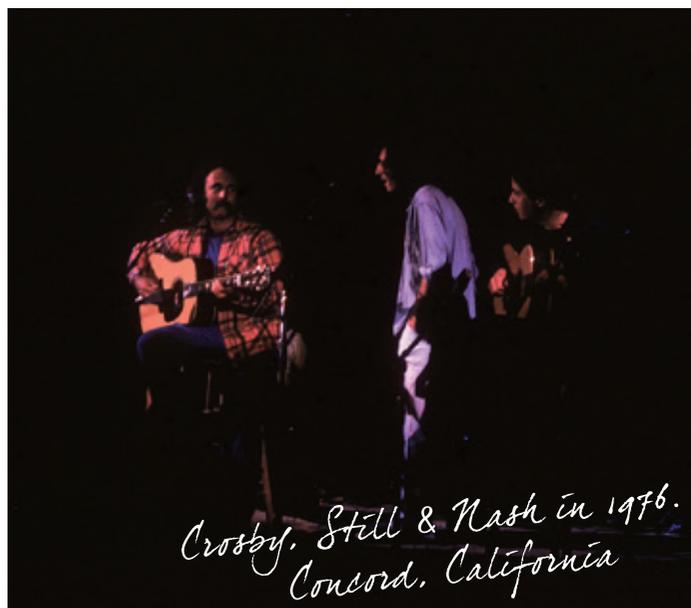
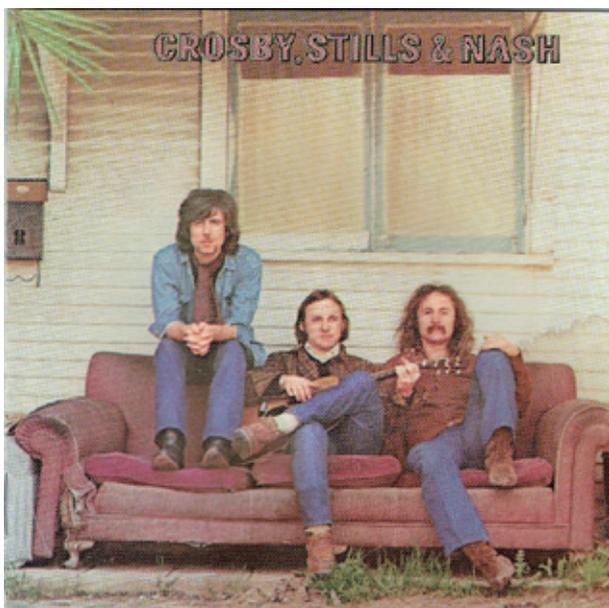


Music

ウッドストックにあった平和のスピリット 『Crosby, Stills & Nash』

Text & Photo: George Cockle
文・写真/ジョージ・カックル



今回は3月に来日する「クロスビー・スティルス・アンド・ナッシュ」のエピソードだ。彼らはアコースティックロックを代表するバンドで、メンバー3人は、それぞれ違う60年代のスーパーグループのメンバーだった。デビッド・クロスビーはザ・パーズ、ステイブン・スティルスはバッファロー・スプリングフィールド、そしてグラハム・ナッシュはザ・ホリーズのメンバーだった。そのグループが燃え尽きて、高いところから落ちてきた遺灰の中から、フェニックスみたいに鮮やかに誕生したバンドだ。彼らは結成してすぐ、1969年の夏に行われたウッドストック音楽フェスティバルにも出演し、その翌年にはドキュメンタリー映画が上映された。それがきっかけで、スーパースターになったが、彼らはそのフェスが2回目のライブで、ニール・ヤングもメンバーとして参加していた。彼らは今までいろんな組み合わせでレコードを作ったり、ライブをしている。ソロだったり、ふたり組だったり、4人全員揃うときもあり、そのたびヒット曲を出している。それは狙っているのではなく、その時に仲

が悪くなっているだけで、ファンには有名な話だ。

俺は1970年代のアメリカで、クロスビー・アンド・ナッシュの組み合わせを見に行くチャンスがあった。会場はサンフランシスコから車で2時間ぐらい離れた町だった。広大な牧場に囲まれた丘の上にある、コンコード・バビリオンという野外会場だ。ライブ当日は大渋滞。坂道だったので、俺のギャ付きトヨタコ罗纳は運転するのが面倒臭かった。うんざりしながら友達と話していたら、うっかりして車が下がり、後の車にゴツンと当たってしまった。ヤバイと思って車から降りると、後の車はアメ車のトラックだった。車のフロントガラスから見た2人は、どう見ても俺より大きく見えた。ヤバイ……。すると、ふたりは車から降りてきて叫んだ。「Hey man, you just hit our car!」マリワナの匂いをぶんぶんさせながら、俺の車のバンパーをみて「Shit, I don't see anything!」(クソ、何も傷がない) 彼らは笑い始めた。「I guess that's why they call it a bumper!」(だからバンパーなんだね)。そして俺にこう

言った。「No problem! We are all here to see Crosby and Nash right?」(問題ない。俺達はクロスビー・アンド・ナッシュを見に来たんだよね)。俺が「Yeah!」と返すと、ドライバーは「Rock And Roll」と言ってトラックに乗った。彼らのトラックはずっと後にいて、笑っているのが見えた。彼らにとってはぶつかったことがすごく面白かったようだ。まだまだウッドストックの平和なスピリットが残っていたように感じた。そのスピリットを今回の来日で感じられるだろうか？

今回日本に来るのは3人だけど、彼らは自分達の名前がバンド名になっているので、古いバンドにありがちなオリジナルメンバーがいないバンドにはなれない(笑)。この写真はアメリカで見た時のもの。当時はカメラを持っていれば、ステージ前まで案内してくれる撮影できた。本当に平和な時代だったな。



ジョージ・カックル ● 60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年+の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com